

「ばあや訪ねて」とその周辺

三木 紀人

一昨年から成東出身の詩人の斎藤信夫さんのお仕事を話題にしながら、あちらこちらに話題を及ぼしてまいりました。一昨年は「里の秋」、昨年は「蛙の笛」、引き続き今年も斎藤さんのお仕事の中ではそれほど注目されていないかもしれないやや地味な歌として「ばあや訪ねて」という歌に触れたいと思います。

と言っても、斎藤さんの長年に亘る多彩なお仕事の中でこれがどのように位置づけられるかというような、作家研究の一環として実証的な立場からお話する訳ではなく、歌詞を読みつつ触発されたあれこれの一端を取り上げるつもりです。

この歌は、ふとあるとき、婆やへの懐かしさにとらわれた年少者が、多分少年だと思えますけど、婆やの里を訪ねていく。そのときの思い、その目に映った風景などが手短かに三番にわたる歌詞の中に書かれていて、一般的にはそれほど知られてはいないかもしれませんが、私にとつてはとても懐かしい歌です。更にそのことを起点にして視野を広げていくと、個人の思いに留まらずに、ある問題が浮かび上がってくるかもしれないという気がしてきます。この歌に歌われているテーマ、つまり、婆やを切実に求め、それとの共生、訣別、そして再会への切実な思いといったことに何かを託している少年の姿には、日本文学ないし日

本文化のある断面が映し出されているのではないかと、ということですが。今回はその辺の問題に近付くための糸口にふれたいと思っています。

現代では、婆やなどは具体的存在として確認できにくくなったし、元々、かつての日本の中でも婆やなるものと直接の関係を持っている人はごく一部の人たちだけだったとも思います。今日取り上げる歌の作者である斎藤さんご自身も、婆やに育てられたことはないと言っています。イでお書きになっています。だからこの歌の風景は空想上のもので、こういうことがあるかもしれない、あるいは、あればどんなに幸せだろうかという気分でお作りになった歌詞のようです。そういうようなことがないまま少年期が過ぎ、大人になってしまい、更に晩年を迎えていくという、長い人生の中で折々斎藤さんは「婆や」なるものにとどのような思いを抱かれたか、その辺は調べておりませんが、皆さんの場合はいかがでしょうか。特に、かつて世の中に婆やが存在した時代に少年であつた方々に伺いたい気がします。というのは、「婆や」と「お嬢ちゃん」よりも、何となく「婆や」と「坊ちゃん」という組み合わせの方が、そこに一つの物語的展開や詩的雰囲気生まれそうな感じがするからです。具体的例でいうと、文学史上最も有名なその組み合わせは、もう思い出された方が多いと思いますが、夏目漱石の『坊ちゃん』です。その「坊ちゃん」という小説と斎藤さんがお作りになった「ばあや訪ねて」は直接関係あるかないかは知りませんが、まさか斎藤さんが「坊ちゃん」を知らないことはあり得ないと思うにつけて、漱石の世界とご自身の経験や思いとが何かのきっかけで結びついて、あるときこういう歌を作ることになった、というようなことが想像できるかと思います。

研究者としてももう少し詳しく実証的に扱っていく場合には、斎藤さんの残された山のようなノートを調査しながら、問題点のあれこれに裏付けを取らなくてはならないのですが、そういう近づき方をするよりも距離をおいて遠くの方から斎藤さんの世界をほのぼのと自由に思い描きたい、という立場で私は今ここに佇んでおります。つまり、今日のテーマについては、単なる一読者の立場で今日の話題に向き合っているつもりですが、その一方で、研究者として長く取り組んできた古代中世文学にも連想が及んでしまうのも事実です。その中に出てくる婆や、あるいはそれに準じる存在と少年たちも直接間接に「ばあや訪ねて」にひびいているのではないかと思うこともあります。その一例が、お手元に配りました資料一枚目の徒然草第四十七段という短い文章なんです。ちなみに今日の資料は五枚にわたっていまして、かえってあんまり盛りだくさんになりすぎて煩わしいと思いつながら、用意させて頂きました。その一枚目の上のほうにメモをプリントアウトして入れておきました。今日どうい話になりそうかということ、自分なりに思いつくままに、並べたものです。

最初に取り上げるのはもちろん、肝心の「ばあや訪ねて」の歌詞です。この歌をご存じない方もいらっしゃるのではないかと思いつながらコンサートでこれを扱った時のビデオ映像を用意しました。なかなか見つからなくて、「里の秋」でしたら私のコレクションの中に二十種類ぐらいあるんですけど、前回の「蛙の笛」は三つぐらい、「ばあや訪ねて」は一つしかなくて、それを今日ご紹介いたします。

「川田正子コンサート」(NHKBS番組)鑑賞

もう一つ、似たようなモチーフの「母さんたずねて」の歌詞も左に載せておきました。

さて、右の「ばあや訪ねて」の歌詞の一番は「森かげの白い道 かたかたと馬車はかけるよ 赤い空 青い流れ ばあやの里はなつかしいよ」、こういうものです。二番が「栗の花 かおる道 ほろほろと 夢はゆれるよ 枝の鳥 チチと鳴いて ばあやの里はなつかしいよ」。三番は「思い出の長い旅 とほとほと馬車は進むよ 暮れの鐘 招くあかり ばあやの里はなつかしいよ」。それぞれ、最後の二行が繰り返されてるんですね。ある懐かしさにとらわれた年少者、おそらく少年が、婆やのところに訪ねに行く、そのときの目にした風景、耳に聞こえてきたもの、香ってきたものなど、いわば五感をもつて受け止めたあれこれが歌われていて、実際にこういうことが体験としてあったのかなかったのか。多分、種になった体験はあったかもしれないが、ほぼ想像の所産でしょう。こういうことを行えば、こういう展開になるだろう、という作りで、その行間に、婆や的なものともいうべき何かへの幼い思慕の情が歌われていて、この短い詩に共鳴・共感できる人にとっては、懐かしい思いを誘われる作品です。

まず、「森かげの白い道」とありますね。そして「かたかたと馬車はかけるよ」。乗り物に乗って行ったということは、遠い道のりであり、手軽に歩いてはいけない場所である。それも、電車やバスではなく馬車で行くのが似つかわしい別世界、そういったところが歌われている。現

実に斎藤さんが住んでおられて、空想を巡らせるよすがとなった地域に、その頃、馬車が通ったのか通ってなかったのか、ということがちょっと気になります。ここにおいてになつてはいるかなりの年配の方は、その時空を御存じの立場で、馬車とそれを巡る風景を思い出されているのではないかと思います。九十九里電鉄のホームページを見てみると、昔このあたりに馬車が通っていたということについて写真入りで詳しく書いてあります。この詩の中の馬車と九十九里電鉄の馬車をいきなり短絡できないでしょうけれど、必ずや斎藤さんが少年時代にそういったものを目の当たりにし、音を聞いたことでしょう。さらに想像を広げていくと、往年のこの辺の方々にとつて馬車は一種の見果てぬ夢に繋がっていて、それを思う度に心の中に何かが甦るといふようなものだったかもしれないと思います。いろいろ調べてみますと、外房線が敷かれる前に馬車鉄道というものがしばらくあった。ところが、それが円滑に運用されるに至らない間に馬車鉄道は時代遅れで不要ということになり、馬車は東の間のなかば以上、幻の世界のものというのになつてしまった。馬車鉄道の具体的例としては、札幌に行きますと、郊外のあるテーマパークの中に走っていて、それに乗ると、遠い明治期にこの辺の方々が夢見た馬車鉄道がどんなものか、類推することができます。それに乗って九十九里の沿ったあたりの一帯に馬車が走っていたさまをはるかに想像すると、この詞に少し近づけるかもしれません。

歌の中の馬車がどういふところを通っていたか 見てみますと、「森かげの白い道」とあります。白い道というのは、何か。舗装されない昔の道はほこりっぽくてそのように見えたことを思い出すと、それを意味するだけのようでもあります。仏教の「二河白道」などを引き合

いにだして別の意味付けもしくなります。遠い遙か彼方にいる救済者への白い道と、これに交差して障碍となる二筋の川を指して、人間の迷いから解脱、生から死への行程を示す語です。瀬戸内寂聴さんの歴史小説に『白道』というのがあり、悟りへの道をひたむきに辿った中世の西行法師を主人公にしております。道の白さを言っているのは、もしかしたらこの少年にとつて、婆やは仏にもなぞらえられる一種の救済者ではなかったかなどと思われて来ます。ちょうどそれは、以前この講座で触れました「里の秋」の中に、天台宗の教えが組み込まれている感じと符合してもいるようです。

さらにそのことと「訪ねる」といふ言葉結びつけてみると違った見通しが拓けてきます。「訪ねる」とは何か。人がなぜその場所に行くのか、そこでどのような人との関係を持つとするか、また、どういう時にそのような行為が必要になるかということを考えるうえで、この言葉の成り立ちを調べると、ヒントが浮かび上がってきます。「訪ねる」とは「手綱」といふ言葉と関係がある。人が馬に乗る時に手綱を手にしつつ馬に跨り、馬の上で安定したポジションを取っていられる。それをしないと体勢が落ち着かない。馬に乗ることによる不安を解消するため、綱の力を借り、人間と馬の関係はやつと安定した状態を保てる。人は生きて行く上で、時々おぼつかない不安定な、馬の背中に乗る時のように不安定な自己を意識しなければならぬ。そこで、自分なりに確かなものを求め、安定した環境を確保して立ち直りたいときに「訪ねる」といふことをするんですね。物事を調べるときに誰かに尋ねる、何か切実な気持ちを抱えて、誰かを尋ねるといふこの二つは、ある意味で同じような行為といえます。この後者は「訪ねる」ことを通してその人の心

のありようが浮かび上がってきます。中国文学やその影響を受けた我が国の作品に、どこかに隠れ住んでいる非常に聡明で立派な人のもとに訪ねていつて、人生についてのヒントを貰ってくるというようなケースとか、自分の今のあり方を告白して、何か導きになるようなメッセージを貰って帰るといふようなことをモチーフにしたものが少なくありません。平安・鎌倉文学なんかによく出てくる、例えば寂しい山里に隠れ住む人を訪ねて語り合うモチーフが私の研究している古典文学の歴史の中にたくさんでてまいります。それに近いような状況が、この少年と婆やの関係において、あったかもしれない。婆やの側からすれば理解しきれない、少年の一方的な思いつめた気持ちによることかもしれないです。少年がふと思ひ余った時に、なぜか家庭の中にいる本当の親は頼りにならなくて、お父さんは外で忙しく不在がち、お母さんは家事に追われて子供に構ってられないとか、そんな事情も考えられます。そこで、今は遠くにある婆やを頼って少年が自分を取り戻そうとし、自分の世界をしつかりしたものを作り直そうとする。そういうような不安に取り憑かれた少年の訪問、それとその訪問先が先生などと呼ぶべき権威ある人ではなく、婆やであるところにとでも懐かしく、身にしみる感じがあるんですね。

さて、その婆やというのは、どういった人なのであるか。昔の日本人にとつての婆やというものを、それが現実の生活の場にいた時代の表現者たちがどのように捉えていたか、いくつかの映画や小説を例にご紹介したいと思います。小説の話をしだすときりがなくなるんですけども、さつき触れました漱石をはじめとして日本の近代文学に登場する一

定以上の身分、特権的な環境と言える家庭を出身の場所として持つていた作家の多くが、「婆や」と自分がどう向き合つて過ごしていたかを記憶に留め、自分の作品の中に書いているのですね。例えば北杜夫『楡家の人々』の中に少年期の自分を支えた「婆や」が出てくるとか。三島由紀夫の小説に出てくるとか。いろいろありますけれども、一々挙げていくときりがないのが今日は手短にわかりやすく、映像を通して見ていただくかと思ひます。最初は島崎藤村の小説を原作とする東宝映画『嵐』です。昭和三十一年の作品です。本当は、「ばあや訪ねて」の作られた昭和十六年封切りの『次郎物語』の方が引き合いに出すのにより適切かもしれないのですが、今日その持ち合わせがないので映像でご紹介出来ません。私は小学校に入る前に親と一緒に見た記憶があり、それ以来見ていないのですが、次郎と婆やお浜の絆を巡る場面は鮮やかに記憶に残っております。二人は親子を超えるほどに強く結びついており、それにいたく感動したことが、今日お話ししようと思つたことの速いきつかけになつていくかもしれないと思ひます。さて、次善の策として取り上げる『嵐』ですが、この題は、暴風雨に例えられるような危機的状況が日本全体を包んだ時代背景に因んでいます。その時代に、ある大衆教授が四人の子を抱えて妻に死なれて、いわば私的な「嵐」の中にあつた。それを描くことに因んでいます。その嵐がほちほちおさまりかけた頃に、なおその被害からひとり脱しきれない男の子がいるのですね。父親は、自分の手一つで四人の子供を育てていこうとしたが、四人は無理で一人だけ里子に出して残りの二男一女を懸命に育て、そのうち余裕ができて里子に出したもう一人の少年を呼び戻して、四人の子供との暮らしを再開しました。ところが、その戻ってきた少年はなかなか

つかなくて、親の差別待遇を受けることになります。例えば父親はとも短気な人で、子供が何かするとすぐ怒鳴ったり、叩いたりするのですが、帰ってきた少年には、不愍さが手伝っているからでしょうか、優しく、失敗をしても悪さをしてもらえない悲しみを引きずって行く少年は、どうしていいかわからなくなっている。そこに新たな家事を支える登場人物として「婆や」が雇われて入ってくるんですね。少年は「婆や」との触れ合いを通して、だんだんと気持ちが変わっていくことになります。そのあたりの一節を見ていただこうと思います。少年の寂しさ、コンプレックス、それからそのお父さんの叱ってくれないときの悲しみ、ほかの子供たちと彼は違うか、彼にとつて「婆や」とはどういう存在なのかなどが手際よく映し出されていくあたりをご紹介します。

「婆や」というと、一般的にしわの寄った高齢のイメージが思い描かれるのではないかと思います。が、「婆や」にもいろいろあって、意外に若い婆やもないこともない。さつきちよつと触れました『次郎物語』のお浜を演じた杉村春子さんはまだ三十代だったはずですが、『嵐』の中の「婆や」もあまりふけていない素敵な人です。演じてるのは当時四十七歳の田中絹代さん。この方は婆やを一つの当たり役として、いろんな映画で繰り返し繰り返しています。それが自然に受け入れられつつ往年の日本人の中にある「婆や」の基本的なイメージが形成されていったと思います。少なくとも私にとつてそうでした。近現代の小説に出てくる婆やを思い描く時に、大学一年の時に見たこの『嵐』の印象が大きく作用していたものでした。ですから、女性としてなお十分魅力的であり、男の子からしてみれば、懐かしいだけでなく、あこがれの対象になるよ

うな人だったと思います。とにかく、田中絹代さんは昭和八年の松竹蒲田映画『伊豆の踊り子』を初期の代表作とする人でした。それから二十三年後の『嵐』で「婆や」としてつつましい役柄を演じ、嵐の中の一家庭の、特に疎外感にさいなまれていた少年の支えになっているのは、なかなか印象深い風景でした。さて、前置きはここまでにして、映画を見ていただきます。

『嵐』鑑賞

いま見ていただいた場面における少年と婆やの関係はどうかという点、母親を失ってしまった悲しみをかなり癒してくれるような人なんですね。もう一つは、その彼女「おとくさん」の言葉の端々に感じられたように、いろいろ子供に対して教え、諭し、叱る人として非常に重要な存在となっている。一方でルックスの点でいうと、さきほども申しましたように、この婆やはまだ女性としてのかわいらしさと魅力を失っていない。お父さんと婆やが並ぶとお似合いのカップルと言いたくなるようなほんのりとした雰囲気があります。そういう微妙な状態で家庭の中で独特の地位・立場を婆やが持ったことになりそうです。今日取り上げた「ばあや訪ねて」の少年の気持ち・立場、そして、この少年がひきずっているらしい過去などを考える上で、今の場面はヒントを含んでいるのではないかと思います。ただ彼とこれの違うところは、時代も違う、場所も違う、家庭環境も相当違うでしょう。この歌の少年は馬車に乗って行った。馬車に乗れるだけのお金を所持しているからには、経済的な余裕がそれなりにあるはずです。ちなみに、この歌のできた昭和十六年

頃、私は東京の西の郊外の馬車が走っている道の近辺に住んでいたものですから、幼少年のまなざしにそれがどう映っていたか、よく覚えておられます。なぜか、記憶のなかの馬車は、日常的な利便性よりも、別世界への移動を可能にさせてくれる非日常的な装置のようで、ことによると、これに乗って出向いた先から帰って来られないのではないかと、というような強迫観念を誘う趣さえ感じられて、ゆえに、それに乗ることを親がなかなか許可してくれないのかもしれないと思ったりしたものです。現実には、格別乗る必要がなかったからでしょうか、そのころ乗った記憶がありません。仮に単身で乗ったらどうだっただろう、するとなら、それはどんな時だっただろう、そして、乗ったらどうなっただろう、などと、ありえなかつたことを空想して再びこの歌詞に戻ってくる、急に情景が迫ってくるような気がします。

この少年は自分の意志で馬車に乗って、婆やの里に向かっているらしい。ただならぬ動機にねざした行動のようです。通っている道が白いということについては、さつきひとつの意味付けを行いましたので、半ば繰り返しになりますが、補足しておきます。心細さを抱えた人から見れば、目的地に自分の必要としている何かが存在している場合、そこに至る道は明るい、輝かしいものに見えて、実際どういう色かということには抜きに白く見える、又は白く記憶されるものではないかということに注目したいと思います。それに関してまた、一つの映画をご紹介します。戦時中の大映映画『無法松の一生』で、その主人公の車引き、「無法松」と呼ばれた荒くれ男が、少年期以来引きずっていた悲しみと寂しさを告白する場面の中に、思い出のシーンとして、幼かった彼が白い道を通ってお父さんを探しにいく場面があります。その頃の彼は継母から

邪険に扱われて、父親が遠くへ働きに行ってしまった時に継母と二人暮らしをするのはとても耐えがたい。家での状態で彼は出発して夜なお白く見える道を通って、遠くにいるお父さんに会いに行く。それを思い出話としてかわいがっている少年に語りかけるあたりをちよつと見ていただきます。相手の少年は、無法松があるきっかけで奉仕することになった軍人の未亡人の子ですが、その辺の背景についての説明は省略して、今は、粗野ではあるが純情な男の、いわば原風景の中の白い道を見ていただければと思います。

『無法松の一生』鑑賞

「ばあや訪ねて」の歌詞の中の子少年にとって「訪ねる」、つまり、行って顔を見る、そして話をするというのはどういう切実な状況に基づくものなのか。今見ていただいた場面の目的地は、出稼ぎの父親の働いている所であり、歌の中では婆やの住まいという大きな違いがありますけど、切実な思いで自分を遠う所へと移動させていくという点で二人の少年には共通するものがあるようです。どうしても会いたい、会わなければならぬ人と会うまでにどのような過程があり、そこにどのような風景が広がっていたか。幼かった頃の無法松の場合はご覧の通りでしたが、歌の方はどうか。歌詞を見ていきます。この少年は馬車に乗って行った。その時の風景として赤い空とありますね。空が赤いということは夕焼けということになります。ちよつと時間が遅い感じですが。そんな時間に婆やの里に向かうのはただ事でない感じもいたします。出発の遅い理由は何か。親の了解はあるのか。その日に自宅に帰れるのだろうか

か、泊ってくるつもりなのだろうかなどと落ち着かない気分させられますね。もう一つ、落ち着かない気分させられるのは、その次に見える「青い流れ」です。青い川というのは、あるのかないのか。ありそうで実はとても稀な風景ではないか、先日ちょっと調べてみたのですが、日本国内では北海道などに二つ三つはあるらしいんですね。地質の関係で青く見えるらしいです。しかし、一般的に海は青く見えるけれども川は青く見えない。その理由については建設省の英語サイトに詳しく書いてありますが、あまりそれに捉われると時間がなくなりそうです。省略しておきます。今私が申し上げたいことは、歌詞にある青い川というのは想像上のものではないかということです。この世のものではない、憧れ、理想、幻想の世界のものであって、さっきの白い道と同じように色自体がある特別な意味あいでの歌の中に出ているのだと思います。例えば、仏教の世界で青は理想とか絶対とか絶対といったものを表わします。また、詩の世界では、青は遠いもの、遙かなものの表現によくもちいられます。配布資料四枚目に入れた中から一つだけご紹介しておきます。三好達治の詩ですが、『花筐』という戦後間もなくできた詩集からの引用で、ページの左のほうに載っておりますが、「かへる日もなきいにしへを こはつゆ艸の花のいろ はるかなるもの みな青し 海の青はた空の青」「はるかなるもの」、つまりここにないものを意識する時、人の目、というより心にそれが青いものとして映る、青く見えると言っているんですね。身近に咲いているつゆ艸の花の色を見て、この詩人は遠い遠い過去を思い出し、その体験を一般化して、青いものを見ると、はるかなるものに心が傾いていくことに気付かされています。青いものといえ、それは海の青であり空の青である。海や空を見ながら人は、は

るかなるものに思いをいたすものだとすることを歌っています。このように青は、ノスタルジーの世界の表現によく出てくるんですね。そうすると、この少年が川沿いの白い道を通っている時に川が青く見えることはいわれはおのずとあきらかでしょう。青い流れ、というより、川を青くみなしつづ婆やの里に向かつていくのは、懐かしさによるひたむきな行動ということになります。少年の突然の訪問を婆やはたして迎えられるか、迎え入れないか、まだわからないし、この詩の最後までわからないですね。なぜそうなっているのでしょうか。

この歌にはそういう解らないことが目に付きます。特に三番にそうですが、二番も同様です。その中に、この少年を突き動かした衝動に触れているかもしれない言葉が出てくるんですね。「栗の花かおる道 ほろほると 夢はゆれるよ 枝の鳥 チチと鳴いて」とあるところです。馬車の中で彼を感じ取った風景の中で、まず栗の花のかおりが出てくる。そして耳で感じ取った中に鳥の鳴き声が出てくる。その鳥はチチと鳴いているからスズメの可能性が高い。スズメの声は小林一茶の句に代表されるように孤独感や寂しさを掻き立てるささやかな音として文学作品によく出てきます。「ほろほろ」という擬音語が夢について使われていますが、これも「チチ」と共鳴・交響する音として鳥の声と関係付けて読み取りたくなる所です。というのは、奈良時代の高僧行基の詠として伝わる古歌に「山鳥のほろと鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」というのがあるからです。第一、二句は「ほろほると鳴く山鳥の」として合唱曲にもなつて学校で歌われたりもしております。学校教育の現場にあった作詞者斎藤信夫さんはこの形で歌を記憶されていたかもしれません。とすれば、「ほろほろ」に父母から遠く隔たつて、ことによると

すでにみなしごの身かもしれない少年の孤独を響かせている可能性が
あります。それを前提として憶測をたくましくしていくと、ほろほろとい
う鳥の声を聞いて、あるいは、聞いたような気分を重ねて、幻聴として
の父母の声に心ひかれつつ婆やのもとに向かう少年の心がせまってきた
ます。

もう一つ歌詞に出てくる栗の花とは何だろうという事も気になりま
す。おわかりの方は多いと思いますが、栗の花の香とは性的な意味あ
いがあるのですね。こういう所ではちょっとお話ししづらい微妙な事
ですけども。俳句で「栗の花」は夏の季語としてその独特の香りを性と結
び付けた作品が多く残っています。歌詞の栗の花は無論それと関係があ
るのではないかという気がします。少年が婆やと別れて時間が経つうち
に、だんだん性的に成熟していった、戸惑うことが多くなったはずで
す。それをどう解決したらいいのか、誰かに聞くあてもないまま、昔何でも
教えてくれた婆やに尋ねてみたい、しかし、一方でそれはばかる気持
ちもあつたことでしょう。そんなたゆたいがこのあたりから想像され
てこないこともない。

こんなことを思つたのは、さっきの『嵐』という映画の中の女の子が
初潮を迎える一節の記憶があつたからです。自分の知識と経験ではどう
したらいいか、解決できそうもないし、お父さんや兄弟にも相談するわ
けにいけない事態に遭遇した時に、婆やがわかりやすく優しくその事
を説明してくれて、「おめでとうございます」と言ってくれる場面がある
んですね。それをヒントに考えると、栗の花の香るあたりを少年が通っ
ているとことさらに表現しているのは、単に季節感を添えるためにな
く、性衝動とそれにもとづくあれこれに迷う少年の内面を映すためでも

あつたのであろうという気がします。

『嵐』の婆やがそうしたように、大人になった、またはなりつつある
しるしをみるに至った相手を祝福し、教諭す婆やとの会話が果たして
始まるのか、それへの予兆を期待して3番を見ると、なんだか意外な方
向に展開していくのですね。「長い道 とぼとぼと馬車は進むよ」。「か
たかた」と軽快に走っていたはずの馬車がいつのまにか精気のないもの
になっていきます。「長い道」「とぼとぼ」とあるので、果たして無事に行
き着けるのか、それさえもおぼつかない雰囲気です。それどころか、到
着する事をなぜかはばかる趣もありげですが、向かつていく風景を描い
て「暮れの鐘 招くあかり」とありますから、再び移動する少年の気持
ちは前向きになっていくようです。暮れきる前に着かなければ、そして、
招かれる身とみずから方向付けて急がなくては。そんな感じでしょう
か。しかし、婆やとの再会は果たされたか。果たされたのであれば、な
ぜそれが明示されていないのか。勿論、結果については暗示にとどめて
余韻を残すための手法と取れば十分でしょうが、実はこの歌の婆やはす
でにこの世の人ではないのではないかという、そこはかとない疑いを私
は捨てることができぬままこの歌を読んできました。というのは、史上
もっとも有名な『坊ちゃん』の清の印象が強いからです。

『清』は、彼女の世界像の中では余りにも遠い所に出発する坊ちゃん
に向かつて、悲しい別れの挨拶をし、ずっと留守を守つてめでたく一年
後に坊ちゃんが帰つて来たときに、生きて迎えますが、まもなく肺炎に
なつて死にます。死に際に彼女は「お墓の中で坊ちゃん、待つてます」
と言うんですね。非常に怖いセリフです。今日の資料の三枚目にその別
れの場面と坊ちゃんと婆やの間にどういうやり取りがあつたか、最初と

最後の結末がどんなものか、わかるようになっていきます。気の毒なこと
に今年の二月に死んでしまった。坊ちゃんが発する時も風邪気味だっ
たのですけども。どうもこの人は呼吸器系に問題が多かったのか、帰っ
てきて間もなく肺炎にかかって死んでしまった。「死の前日におれを呼
んで、坊ちゃん後生だから清が死んだら、坊ちゃんの御寺に埋めて下さ
い」と遺言を言います。御大事に自分の亡骸を葬ってほしい、その墓の
中で私は坊ちゃんが将来来るのをじっと待っていると言い残します。ど
うも、この清は生前、坊ちゃんへの献身的な生き方を人生の全てとし
ていた人ですのでけれど、死後も魂が極楽に行くとか、仏に近づくとい
う事は考えずに、いずれそこに来るはずの坊ちゃんを待つと言いつつ
るのですね。これが小説の結末です。坊ちゃんは清の死後に他の誰とも

清以上に深く結びつくことなく、いずれ清の待つ所に行くしかない。も
ちろん、清の遺言に拘束される限りはという条件付きではあるでしょう
が。そのことに作中の坊ちゃんは格別否定的ではないらしいことを含め
て、ずいぶん驚くべき終わり方です。その終わり方への解釈として、清
は、実は坊ちゃんが帰って来たときにはすでにこの世の人ではなかった
という説があります。そのように小説には書いてないのですが、そもそ
も小説の内容は坊ちゃんの語るところではという作りになっていて、記
述されていることと客観的事実とは一致しない可能性もあるという、あ
る意味では当然のことに注意しての説です。本人が語ってるままを丸々
鵜呑みにするというのは現実の生活の中で賢い人はあまりしないので、
小説を通して坊ちゃんが告白で語られている事がすべて客観的事実と
してそのまま受け止めないほうがいいかもしれない。そうすると、坊
ちゃんは、帰った時にすでに死んでいた清をこの世にしばらくはいた人

として語っているいわれは何かという問題が浮かび上がってきますが、
今日の主題からややそれますので、立ち入らないでおきます。今は、「ば
あや訪ねて」の作詞者の斎藤信夫さんは、『坊ちゃん』の行間に、今ご
紹介した説にあるのと似た何かを直感的に感じ取っておられたのではな
いかとも思われるとのみ申しておきたいと思えます。そう思いたくさせ
るような気配が、この歌の読後に感じられてなりません。つまり、歌わ
れている婆やは故人であり、「ばあやの里」はあの世、極楽のようなイ
メージで描かれている。そこに至る道の白さ、流れる川の青さ、赤い空、
鐘の音、灯火などは故人を幻視させる記号であって、亡き婆やに魅かれ
てその在所を訪ねる少年は、なぜか思い余ってこの世を去ろうとしてい
るかのようでもあります。

こうお話しできて、少し行きすぎではないかと思いの方もいらっ
しやるでしょう。私も、一義的にこう読み取るべきだとまで申している
つもりではありません。優れた童謡は何気ない単純で手短な表現で、あ
る風景や心を歌いながら、意外と多義的・多層的につくられているよう
であり、さまざま読みを許す、というより、期待しているものなので
はないかと思っていて、今日のこの歌もその例になると思ったことのご
報告をするつもりでございました。性急な部分もあり、大変恐縮に存じま
す。ご静聴ありがとうございます。

(みき すみと・本学国際人文学部客員教授)

